

令和3年度 第1回磐田市総合教育会議 会議録

日 時 : 令和3年8月31日(火) 午後3時30分～午後5時00分

会 場 : 磐田市役所 西庁舎3階 304・305 会議室

出席者 : 市長、教育長、青島美子委員、秋元富敏委員、鈴木好美委員、大橋弘和委員
(出席者6名)

事務局 : 企画部長、教育部長、秘書政策課長、教育総務課長、学校教育課長補佐、
秘書政策課政策・行革推進グループ長、教育総務課総務グループ長、担当

傍聴者 : なし(新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う緊急事態宣言発令中のため)

【会議次第】

1. 開 会

2. 市長あいさつ

3. 協 議 事 項

すべての子に教育の手を差し伸べるためには
～不登校、引きこもり、1人1台PCの活用について～

4. 閉 会

[協議の主な内容]

	<p>すべての子に教育の手を差し伸べるためには ～不登校、引きこもり、1人1台PCの活用について～</p>
市長	<p>忌憚のない意見をいただき参考にさせてもらい、市政に反映できるところは反映させたい。 教育長から挨拶を兼ねて発言をお願いしたい。</p>
教育長	<p>今日は、不登校とGIGAスクールについてやらせていただく。不登校については、かなり人数が増えてきている。しかし、県平均、全国平均と比べると差はなくなってきている。日本全体では不登校数、または引きこもりの数はどんどん増えてきている。磐田市は、不登校の大きな壁の解消に向けて大学の先生方と話し合いをしながら取り組んでいるところ。 GIGAスクールについては、本当に積極的に進めてもらえたらと思う。市当局の財政的な面でも色々なサポートをしていただいている。そういったものを受けながら着実に少しずつ進めている。</p>
市長	<p>事務局から、資料の説明をお願いします。</p>
事務局	<p>「GIGAスクール構想」は令和元年度の後半に、「1人1台の端末を行き渡らせよう」と文科省が出してきた。当初は、「令和5年度くらいまでの予定で整備をするように」という話だったが、「補助金を出すから、令和2年度中に整備をするように」と方針転換があった。市の財政部局にも大変力強く支えてもらい、実現させることが出来た。磐田市でも「なぜ端末を入れるべきなのか」という話があったが、色々な機関の調査で、「日本の子供達は端末を使って深く考えた学習が十分に出来ていない」という結果があることから「磐田市の子供達にももっとICTを強化した学習をしたい」と導入した。それを実現させるために「GIGAスクール構想」というものがある。 磐田市としては、小学4年生から中学3年生までは、Chromebookという端末、小学1年生から小学3年生まではキーボードはないiPadを整備して、1人1台が実現している。小学1年生から3年生は2学期の頭から使えるようになっている。なぜこのような端末を選んだのかというと、Chromebookはキーボード入力ができるということを第一に考え、非常に安価で耐久性もあり、使いやすいということで採用した。小学1年生から3年生は、ローマ字の学習を行うのが小学3年生の後半であるため、ローマ字を学習した後にChromebookに移行していく。これについては磐周地区の袋井市と森町もこのような形をとっている。 今年度は、4月26日にGoogleアカウントを全員分発行した。それから全教職員を対象に学習試験アプリ、本端末の使い方、端末の中に入っているアプリケーションの使い方の研修を行った。それから学校は、教室の中以外でも</p>

端末間のやりとりが出来るような状況になっているので、災害やコロナでの休校などで学校に来られなかった場合を想定して、オンラインの授業等をしてほしいと依頼をしてきた。学校教育課の指導主事が学校訪問をして状況把握をしている。その結果ほぼ毎日使っている小学校が100%、中学校が90%だった。これは調査の段階だが、2学期に更に増えてくるのではないかと考えている。夏休みに持ち帰りを実行した学校も半数以上に上っている。

この端末を使った学習の様子を見ている中で、インターネット検索、端末操作について教え合う子供たちがいる。また、タイピングの技術が向上している。1番大きいのは、端末を通して人との関わりや、端末を操作している中で自分の考えをまとめることが出来るようになってきているのが非常に強いなという印象がある。また、提出物で、「英語で話したスピーチを録音、録画して提出する」「プレゼンテーションを撮影したものを提出する」「音楽のリコーダーを演奏したものを提出する」といった事もできるので、非常に活用の幅が広がっている。

それから、学校と子供たちの繋がりを大切にするための事例として、不登校傾向にある子供たちに端末を届けて、授業の様子を見たり、顔は出さないけれども課題を提出したり、やりとりをする中で授業に参加するという動きも出てきている。働き方改革を進める中で、欠席連絡を電話で受け取って、ホワイトボードに全部書いて把握するのではなく、家庭から携帯電話で「欠席します」と送ることで、担任が教室で端末を見て欠席を確認できるようになっている。それから全校に向けたアンケートの自動集計ができるところも良いなと感じている。

今後については、コロナ禍の第5波ということで非常に感染力の強いデルタ株が出てきているので、全校で実際にオンライン授業を試みる。9月10日に磐田北小学校と富士見小学校、それから9月17日には全小中学校で、午後の授業をオンラインで行う。オンラインは常につないでいるだけでなく、「この時間までに課題を出してね」ということを指示して、しばらく考える時間を作る、時間になったらまたオンラインで繋げてというように色々なやり方が考えられるので、色々な授業を行って、検証して更によいものにしていくという事を考えている。更に、「教育長一斉朝礼」というような活用についての検証もしていきたいと考えている。

引き続き不登校についての話をしていく。磐田市の不登校の現状は、小学校・中学校とも、数としては少しずつ増えている状況にある。ただ、色々な課題を子供達と持つように心がけていて、全く学校と関わりがないということはまずほとんどない状況である。不登校の中にも「全く学校に出てこない」という子ではなく、子供によっては「放課後から少しずつ学校に来られるようになった子」とか、「少しずつ職員が関わる、改善する方向に向かっている子たち」もたくさんいる。また、その中の対策の一つとして、不登校対策リーフレットというものを作成して、初期対応の徹底を図っている。旧豊田町の役場の近くにある教育支援センター「あすなる」で、「学校には行

けないけれど支援センターには行ける子」「センターの職員が訪問している自宅に居る不登校の子」をサポートし関わりを持つことで、少しずつ学校に復帰している生徒もいる。心の教室相談員が、市内の全中学校と小学校3校に配置されていて、日々子供たちから多くの相談を受けている。また、1人1台端末を使って、不登校と関わっている。不登校といっても「学校の中にある別室に居る生徒とオンラインでつながって学習をする」「家庭学習を少しずつオンラインで繋げて取り組んでいきたい」と考えて、この夏休み、あるいは日々の生活の中で少しずつ進めているところである。このような取組みを情報共有して、いろんな学校で進んで行くように心がけている。

市長 事務局からの説明内容、GIGAスクールに関する事、不登校に関する事について、皆さんから率直な意見をいただきたい。まずは教育長何か補足はあるか？

教育長 補足は特段ない。不登校の数について、平成30年度の段階で議員から質問されて、私は「県の平均よりかなり少なくなっている」と答えた。しかし、県と全国については一気に増えてきている。あと、令和元年度、令和2年度に小学校では、急激に増えてきている。中学校は、小学校から中学校に上がった中学1年生の出現率が高い。小中一貫教育、または学府一体構想の中で、その辺りの関わりが解消できていくことが必要だと考える。平成29年度、平成30年度は「こども未来プロジェクト」を各校区にやってきた成果が確実に出たという判断をしている。色々な障害はあったが、学府ごとに少しずつ進めてきた状況である。特に小学校については、ケアをしながらやっていくことが必要だと思う。

市長 では皆さんからもざっくばらんに質問なりご意見をいただきたい。

委員 不登校そのものは減少傾向にあると捉えてよいのか？

教育長 数は多いが、一応フォローが出来ている数は多く、全然学校に行けていない子はあまりいない。

委員 学校側も不登校の理由や、その子の環境を把握したうえでの不登校と捉えてよいのか？ということであれば磐田市としては問題にする必要はないと思う。というのは学校もちゃんとわかっていて、先生たちも把握して、子供の様子も分かっているのであれば問題ないと思う。

委員 私の率直な感想だが、不登校についてはそれほど急に増えているという印象は受けていない。資料では、縦軸の尺度がかなり大きく広げて記述されており倍増しているとのことだが、全体的な人数としてはそれ程大きな数字

ではないと考える。また、中学校の県平均・全国平均と比較すると、全体的に増加傾向にある中で、磐田市はそこまで上昇していないとも捉えられる。

先程、教育長から説明があったとおり、磐田市の場合は「あすなる」などの外部支援にて、かなり手厚く対応していただいているという印象を受ける。そこで、引きこもりになった子もしっかりフォローしていただけているという印象を持っており、社会に復帰できるようなシステムが少しずつできているなど感じている。

では、「なぜ引きこもりの子が増えているのか」の要因として、「世の中全体的に子供たちの耐性が下がってきているのかな」と感じる。私はスポーツ少年団にて15年間程教えているが、「子供たちの我慢が出来なくなっている」・「自己中心的な考えが強くなっている」傾向が、間違いなくあると感じている。以前は、家庭の中でしつけなどをかなり厳しく行ってきたから落ち着いていたところが、少しずつ甘くなってきたからだと思われる。ただ、そこに対しての特効薬はないので、「社会全体でたくましい子を育てる」ということを少しずつアプローチをしていくしかないかと考えている。「出来るだけ耐性のある子に育てていく」ということを意識していく。

あと、仮に不登校で学校に行けなくなったとしても、もう少し寛容な目で見てあげるということが必要かと思う。「少くく休んだってよい」人生90年・100年の時代に、30日程度休むことは大した話ではない。実際に勉強したことを生かすのは社会に出てからが勝負なので、そこから巻き返すことは十分にできるし、そこで挽回できる社会、環境を作ってあげることが大事であって、今の小中高の教育環境を劇的に良くすることに力をいれることは、これ以上やる必要はないと私は考える。

社会全体が寛容な目で見て、言葉は悪いかもしれないが、不登校等で出遅れてしまった子でもチャンスがある。手を差し伸べることが大切であり、そういう視線で見ることが大事だと考えている。

委員

「学校に来なくてもよい」という世間の風潮や、不登校者数がだんだん増えていくのはしょうがないと思う。自分の娘も中学校の時に、不登校ではないが訳あって3か月学校に行っていなかった。その時に授業が受けられないことに対して先生もフォローはしてくれたが、やはり保健室登校のように、登校してプリントだけやっても「授業をやっていない」というのは娘にとっては不安だった。中学3年生になった時に「私は理科のこの分野は、1年の3学期に行っていないからスツと分からない」と言っていた。先日、保健室のChromebookの遠隔操作を見て、「こうやって理科の実験を実際に遠隔で見れば、もうちょっと実感できたのかな」と感じた。GIGAスクールの構想で「不登校の子に授業を見せる」のは、実際のもは触れなくても映像で見られるのは大きく、友達の意見を聞けるのは子供の成長にはとても良いのかなと思う。GIGAスクール構想が娘の時にあったらもうちょっと良かったのかなと思った。

LTEでGIGAスクールをやるとのことだが、20GBは動画を見ればすぐに超えてしまう。例えば子供たちが家に持ち帰った時に、何時間くらい授業を見る事が可能なのか？先生が1回立ち上げて、繋げて、切って考える時間を与えて、時間が来たらまた繋げる、という話だったが、今後本当に学校に来られなくなって、1日中行うとなった場合は、通信容量は何日くらい持つのか？特にWi-Fiのない家庭もあって、現実的に不安なのでお聞きしたい。

事務局 20GBの量であれば、1日に1時間ずっと動画を見続けると20日間程度なので、毎日6時間であれば1週間もたないくらいになる。

委員 学校でもLTEで、1か月間もっていたということか？

事務局 学校に居る際は動画をずっと見続けることはない。私達も会議で1時間動画を見続けることは大変疲れるので、全ての授業を動画で行う事はなかなか現実的ではない。

委員 先生の姿を映すのは動画なのか？

事務局 そう。その様に行う授業もあると思う

委員 保健室の子供たちの授業を見て、毎時間やっているとなら20GBはすぐだろうなと思った。不登校の子が、学校の様子を見ていたらすぐに20GBは足りなくなってしまうと思う。不登校の子に動画を見せるにしても、ある程度制約があると思う。

委員 自分も子供が3人いる。上の子が今日からリモートの授業を受けていて、自分も早く帰って見ていた。中学生なら出来ると思ったが、9月17日に小学生だけで出来るのかなと思う。これからコロナが蔓延して学校に行けなくなったら困ってしまうと思う。

市長 オンライン授業は、行う方も受ける方も口で言うほど簡単な事ではないという認識をしている。だから学校でもすんなりオンラインで、ということとはできないと受け止めていて、最終手段だと考えている。だからこそ、どうしても学校にいけなときの手段としては、オンラインでも互換できるくらいの感覚でないといけない。何でもできるツールで、あれだけですべてを解消できるみたいな世の中の風潮というのは、少し現場感とはずれているのではないかなというのは感じているので、今言っていたとおり、子供達だけで出来るかどうか不安なところなので、慎重に進めていきたいと考えてい

る。

私から問題提起をさせていただく。不登校関係について、私が議員になってからの8年間で色々変わっている。その中で一番の大きな変わり目は、2017年の法改正だと思っている。それは「教育機会確保法」が施行されて、今までは「学校に行かなければならない」と思っていたのが、委員が言っていたとおり、不登校の生徒は「休んで良い」という休養の必要性、学校以外の場が重要だという2点が追加された。それを見たときに、磐田市は教育支援スクール「あすなろ」など一生懸命やっただけではないが、場所が旧豊田町のところだけなので、足りてないのではないかなという認識を受けている。「フリースクール」という選択肢も、浜松に通わないといけなくて、磐田にはない。袋井市と掛川市にも無い。私自身、義務教育で当たり前のように公立の学校に通っていたが、この地に生まれたのなら、この学校に入るのが当たり前だという雰囲気の中で子供達には自らの選択肢はない状態である。クラス替えの際もそのクラスに入らないといけなくて。その中で数%の子が、どうしても適応できないのは当然の社会かなと思っている。先ほど言っていたとおり、まずは「学校に行かない」という事を認めてあげたい、「行かない」という選択肢もあると。磐田市はフォローする教育支援センターのようなものがしっかりあるということと、行政だけでなく民間の中にもあるということをやっていきたいと思っている。この点は私の公約にも書いてあるので、少し手厚くやっていきたいと考えている。また、今年4月あたりから不登校特例校が社会でだんだん出来始めていて、岐阜市立草潤中学校というところが東海地域では注目されている。不登校特例校は、県庁所在地くらいしか出来ないのかもしれないが、生徒40人に対して先生26人という凄く手厚さ、まさに教育支援センター並みの手厚さがある。このような事例が出てきているので、磐田市では難しいかもしれないが「浜松市でもし出てきたら入る」という選択肢が増えるという意味では、方法の1つと考えている。いずれにしても、子供たちの選択肢を広げていくことは親の選択肢を広げることになるので、「学校に行かなくてもこういう選択肢が磐田市はあるのか」という安心感を届けていきたいと思っている。加えて「親の会」のようなものがあると良いなと常々思っている。障がい者になると「親の会」はたくさんある。不登校に対しての「親の会」は作りにくいというのもあると思うが、「あすなろ」に親だけで集まってちょっと話をする会のようなものはあると「あすなろ」のセンター長から聞いているので、そこをもう少し全校に広げていきたい。親孝行のできる仕組みを作っていきたいと感じながらこの4カ月間過ごしてきたが、コロナの関係でなかなか出来ていない。その辺りの考え方について教育長を含めて教えていただきたいと思う。

教育長

委員が言っていたとおり、子供たちは学校に来ることがすべてではない。「学校に行かない」選択をして少しくらい休んでも、やり直してちゃんとやっていけるような社会が大切だと思う。また、スポーツ少年団で、大人と子

供たちが出会うことで、学校に来る、来ないにかかわらず、次の段階に進むことも大事だと思う。ちょっと方向性を転換することも大事だと思う。そういう時代になっていると最近思う。「石の上にも3年」と言うように3年間頑張ることも大事だが、弾力的に子供たちを捉えていくことも大事かと思う。

先程、市長が言っていた、民間も含めた「フリースクール」を、実際に磐田市に作るというのは難しい事と思う。民間で、職業としてやっていける人がいないとなかなかできないと思う。浜松市ではドリーム・フィールドというのがある。ドリーム・フィールドに色々話を聞いたが、その教育の力は自分達には、真似できない点があった。磐田市には、学校の先生が不登校の生徒に勉強を教えたり、キャリア教育ができるような施設を民間企業と協力して、市の東側に作りたいと考えている。そこに企業の指導者も入って、キャリア教育をやってもらいたいと思う。「フリースクール」は難しいが、企業と協力をして学校に行けない子たちのための支援や引きこもりの子達にキャリアサポートなどが出来るような場所になれば良いと思っている。

また「親の会」についても、広まって行って欲しいと思う。「あすなろ」では親御さんを集めて進路を中心にして色々な話をしているので、教育の面で見てもかなり有効だと考えている。

市長 他にコメントはあるか？

委員 見付の「ほっと」はどのように利用されているのか？

教育長 親御さんからの相談を受けたり、引きこもりの子の面談、福祉課による学習支援、生活保護を受けている塾に通えない子に勉強を教えたりしている。

委員 「ほっと」は、食事なども用意できるので、一緒に食事の支度をしたりして心を開いていける場所にできれば良いと思う。そういった面ですごく期待をしている。そういう活動を通して、不登校の子達も社会生活、人とのかかわりの仕方を勉強出来たら良いと思う。

教育長 引きこもりの子のアプローチという面では他の市にはない施設であるため、より発展出来たらなと考えている。

市長 15歳から18歳の間をうまくフォローしていきたいと思っていて、そういうところで「ほっと」を使ってほしいと思っている。

委員 先程、教育長からあったキャリア教育について、岩田小学校で行われた「未来授業」では、様々な職業の方の経験談を聞くことが出来る。竜洋西小学校

では若手農家が苦勞して作り上げた野菜を紹介して、翌日に子供達と一緒に野菜を調理し、一緒に食べる、といったことをしている。要するに学力をつけさせるだけが教育ではなく、一番大切なのは社会に出てからたくましく生きていく力や、やりきる力をつけることだと思う。自分の将来をあきらめさせないことが大事だと思う。思い返してみると自分自身子供の頃に聞いた職業体験談は今でも覚えている。そう考えると、今の子供達も上手く行かない中でも成功した話を聞いていると、自分がかじけて学校に行けなくても「社会に出てからやり直せる」「自分は決してダメな人間ではない」という考え方ができるようになる。そこが一番大事だと思う。

必要とする学力は後からつけられると思う。それよりも大切なのは、「自分の将来をあきらめない」と胸に残る様な授業をできれば良いと思う。

市長 他にコメントはあるか？

委員 「あすなる」は、何人くらい利用しているのか？

教育長 令和2年度は通級児童生徒34人、訪問児童生徒数9人となっている。

市長 利用者のエリアはどうなっているのか？
外国人の子もいるのか？

事務局 数字はないが、感覚として旧豊田町のエリアからが多いと思う。やはり遠いと送り迎えが負担になってしまう。外国人の子はそんなにいないと思う。

市長 不登校の外国人の子はどのくらいいるのか？

教育長 それはわからないが、そんなに多くはないと思う。「あすなる」を利用するのは、地域的には旧豊田と旧豊岡村が中心になる。

訪問児童生徒数が引きこもりの予備軍である。訪問指導員は繋がりを作って、学校の先生が訪問して話ができる状況を作ってくれている。

市長は「15歳から18歳の間をうまくフォローしていきたいと」言っていたが、その空白の2年をいかに拾い上げるか、いかに私達が埋めていくかが重要になると思う

市長 しっかり2年間を埋めてほしい。

委員 昨年度、休校期間があった時に、「どうせみんな学校に行っていないから」ということで、学校に行けるようになったという子もいたと思うが、その子たちのその後はどうなのか？

教育長 私に聞いた中では3人くらいいた。その後の追跡調査はしていないが、コロナを逆に良い方向で考える材料として捉えている。

市長 私自身引きこもりのボランティアサポーターをやってきたが、感覚的には小中学生の不登校の子は復帰できている気がする。働きだしてから挫折して引きこもってしまった方が、復帰できないことが多いように感じる。そういう意味でも、子供のうちの不登校というのは多様性の中の選択肢の一つではないかなと思う。本当に困るのは、発達障害などで社会に適用できなかった今の30代の引きこもり。今は子供のころから発達のサポートはしてくれているが、もう1段階レベルを上げてサポートをしていきたい。完全に寄り添うのではなく、就労に向けてのサポートが上手くできないかなという事はこども部と話をしている。

80歳の親に対して50歳の子が引きこもりになる問題がある。30歳になるとなかなかフォローしきれないように感じる。社会との繋がりを作る「ほっと」みたいな引きこもりのサポートプログラムを充実させていきたい。

市長 GIGAスクールの話に戻すと、コロナの影響でマウンテンビュー市へ行けないので、現地の高校生と磐田の高校生がオンライン交流をした。私も参加したが、「こういうことが出来る世の中になったのか」「英語の先生に教えてもらうのではなく、ネイティブに直接いろいろ教えてもらえるようになるのか」と感じた。

委員 今の大学生は、オンライン留学をしている。交換留学はコロナでできないので、毎日夕方からパソコンを開けて、夜から向こうの授業を聞いたり、クラスメイトと会話をしたりということは既にやっている。

留学先の学生たちと友達になるのは中学生、高校生でも、提携する学校があればできるかと思う。

教育長 メルボルンとかすでに提携しているところはある。

市長 小中学生でも実現できればグローバルな思考になる。「行きたい」という気持ちが芽生えてくる可能性もある。

教育長 オーストラリアであればそこまで時差がない。

委員 オーストラリアやニュージーランドはやりやすいと思う。

委員 オンライン留学について賛成。

城山中の英語の授業を見たときに、メールを英文で書くということをやっている、「生きた授業だな」と思った。実際にオンラインで繋がった人たち

と顔を合わせておいて、文通のようにやりとりをするきっかけを作ると良いのかなと感じた。

市 長 生きた英語を学ぶにはいいと思う。そんなやり方も選択肢の一つだと思う。

委 員 キャラクターが付いているグッズは日本ではかなりあるが、ニュージーランドではほとんどないらしい。自分の娘がしっぺいのクリアファイルを見せて「市のマスコットキャラクターだよ」と伝えたところ、「そんなものがあるの」と驚かれた。こういった日本では当たり前だけど、向こうでは違う「へえ」と思う事が文化の違い、多様性を学ぶきっかけになるのではないかな。オンライン交流が出来ると楽しいと思う。

教育長 早速、明日オーストラリアの先生と話をしてみる。

委 員 モデルとして城山でやってみるといいかもしれない。

教育長 ちょうどしっぺいのクリアファイルがあるので、それを贈る。文化の違いだけでなく、コロナに対する考え方、見方、アプローチの仕方などの違いも見ることが出来ると思う。

市 長 他に問題提起、提案はあるか？

委 員 導入してから2、3日しかたっていないが、小学1年生から3年生のiPadを使用している様子を教えてほしい。

事務局 自分の端末のアカウントにログインした段階。子供たちはアルファベットを見たこともない状態で行うので、学年ごとにサポートして行っている。

教育長 ID、パスワードは、小学生でも2日やれば絶対できる。子供を信用してもらえればと思う。

市 長 私の子供は、私のスマホのロックを解除してしまう。今の子たちは当たり前のようにYouTube見ている。私の子供は4歳と6歳だが、起きたらYouTube見ている。YouTubeは、自分の興味あるものしか見ないので多様なようでどんどん狭まっていく。自分たちが子供のころ、テレビは色々なものがやっていて、色々な情報を得られていた。YouTubeは自分の見たいチャンネルしか見ないので、ある意味多様だけど、その人にとっては画一的というか、少し怖いと思う。

委 員 今の大学生が自分の地域に緊急事態宣言が出ている事を知らないという

ことがある。それは、新聞を見ない、テレビがない、動画で自分の気になるニュースしか見ないため。私の娘も「自分の県に感染者が何人いて、緊急事態宣言が出ているかどうかは普通にしていたら知らないかも」と言っていた。高校生もテレビを見ない、自分の興味があるところしか検索しない。テレビを見ないという事は全体のニュースを知らないということなので怖いと思う。

教育長

テレビの方がまんべんなく情報を得られて、ニュースを見る時間がある。今日色々話聞いて、まず不登校、引きこもりは、見方、考え方がポイントになる。また、情報教育の方向性は、危険性もあり、活かすことも出来る、海外とつながることも出来ること。友好関係を結ぶ1つの要素になると感じた。

市長

いずれにしても教育委員会と当局で、財政的な支援から、企画部門と連携をしていき、1番重要な子供の義務教育の部分を皆さんに見て頂いていると思っているので、これからも何か気になる事があれば、忌憚ないご意見をいただきたい。